

St. Luke's International University Repository

看護学士課程における入学者選抜方式の検討

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): nursing, entrance examination, baccalaureate program 作成者: 小山, 真理子, 菱沼, 典子, 菊田, 文夫, 近藤, 潤子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/283

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



看護学士課程における入学者選抜方式の検討

小山 真理子* , 菱 沼 典 子**
菊 田 文 夫***, 近 藤 潤 子****

要 旨

本研究の目的は、A 大学で従来実施されてきた入学者選抜方式が、学生の入学後の学習の成果を適切に予測しうるものであるのか、高校の成績は入学後の成功を予測しうるのか、また、看護学の学習を成功させるには入学後の成績が予測に使えるかどうかを明らかにすることである。

大学に保管されている昭和53年度から昭和62年度までの入学者551名（うち推薦入学者61名）の記録を分析の対象とした。データ分析の方法は、一般入学者490名については、高等学校の成績、入学試験の成績、在学中の成績の各々の成績間についてピアソン積率相関係数を求めた。さらに、入学試験の成績を独立変数とし、在学中の成績を従属変数として、ステップワイズ法による重回帰分析を行った。推薦入学者については、在学中の成績のみを分析の対象とし、前述と同様の分析を行った。また、年度別に入学試験3科目の成績が上位10位と下位10位の対象者の入学時の成績順位を年度別に調べた。さらに、推薦入学者の年度別在学中の成績順位を求めた。

その結果、入学試験の成績と高校の成績については英語に有意に弱い相関がみられたが、その他の科目間では有意な相関はみられなかった。入学試験の成績と在学中の成績については、英語が中程度の有意な相関があり、入学試験の英語と在学中のドイツ語には中程度の相関のある年度と全く相関のない年度があった。入学試験の国語は在学中のどの科目とも有意な相関はほとんどなかった。入学試験の化学は在学中の自然科学と厚生科学に各々弱い相関がみられた。入学試験の面接は在学中のどの科目とも相関はみられず、また、小論文は在学中の総合科目との間に弱い相関があったが、その他の科目とは有意な相関はなかった。重回帰分析の結果、在学中の英語に最も影響を与える入学試験科目は英語であった。高校の成績と在学中の成績の相関をみた結果、高校の英語と大学の外国語、高校の保健と大学の体育、高校の理科と大学の自然科学に各々弱い相関があった。在学中の科目分類間では、基礎科目と看護学、英語とドイツ語が高い相関を示し、自然科学と人文社会科学、看護学と厚生科学、基礎科目とドイツ語が中程度の相関があった。英語は在学中の他の科目との相関が有意に高い傾向があった。入学試験の得点順位が上位10位以内であった者の約31.4%が在学中も10位以内であったが残りは11位以下に分散していた。入学時に下位10位以内であった者の7.8%は在学中に上位10位以内に成績が伸びたが、多くは11~40位であった。また、推薦入学者については約34.4%が在学中の成績は上位10位以内であり、14.8%が下位10位以内に属していた。

キーワードズ

看護 学士課程 入学試験

* 聖路加看護大学助教授（看護教育学）

** 聖路加看護大学教授（解剖生理学）

*** 聖路加看護大学講師（情報科学）

**** 元聖路加看護大学教授

現札幌医科大学保健医療学部

I はじめに

看護婦不足が社会の問題である今日、A大学は全国の看護基礎教育機関のわずか2.4%を占める大学22校の中に含まれており、将来看護のリーダーシップをとるべき人材を育成するという使命をになっていると考えている。そして昨今、A大学の入学試験の倍率が10~11倍という中で、大学の教育目標を達成する人材の資質や能力を、入学時に適切に評価することは重要な課題である。

A大学では、入学者選抜方式として学力試験を課す一般入学試験と、学力試験を課さない推薦入学試験の2種を採用している。一般入学試験では従来、英語、国語、化学の学科試験による第一次考査と、第一次考査合格者に対する小論文、面接および健康診断による第二次考査を行い、その評価を用いて合格者を選抜してきた。しかしながら、入学試験の評価が、入学後の学業の成功を予測しているのかどうかについての研究は、行われていない。また、高等学校の成績が、入学後の学業の成功を予測できるかどうかについても、研究はされていないし、主に、高等学校の成績によって入学した推薦入学者の入学後の学業の行方についても、研究されていない。

看護教育における入学試験に関する研究は、過去20年間の文献検索を行った結果、いくつかの報告がみられた^{1) 2) 3) 4)}が、いずれもが看護専門学校の入学試験に関するものであり、看護学士課程の入学試験に関する報告はみられなかった。そこで今回、看護学士課程の入学試験のありかたについての示唆を得るために、高等学校の成績と、入学試験の成績と、看護学教育課程での成績の関連性について分析し、検討を加えたので報告する。

II 研究目的

A大学で従来実施されてきた入学者選抜方式が、学生の入学後の学習の成果を適切に予測しうるものであるか否か、また、高校の成績は入学後の学習成果を予測しうるかどうかさらに看護学の学習を成功させるには、入学後のどの科目の成績が予測に使えるかについて、以下の視点から明らかにする。

- 1) 入学試験の成績と高校の科目別成績との関連性を明らかにする。
- 2) 入学試験の成績と在学中の必修科目の成績の関連性を明らかにする。
- 3) 高校の成績と在学中の必修科目の成績の関連性を明らかにする。
- 4) 推薦入学者の在学中の成績の順位を明らかにする。
- 5) 入学後の必修科目間の成績の間連性を明らかにする。

る。

- 6) 上記1)~5)の結果により一般入学試験および推薦入学のありかたについて考察する。

III 研究方法

1. 研究対象

昭和53年度から昭和62年度までのA大学の入学者全員551名を対象とした。551名のうち、一般入学者490名、推薦入学者61名であり、その年度別内訳は表1に示す通りであった。

〈表1〉対象者数

入学年度	入学者数		
	一般入学	推薦入学	計
昭和53年度	51	—	51
54	46	9	55
55	49	11	60
56	47	8	55
57	48	7	55
58	50	5	55
59	51	4	55
60	52	3	55
61	48	7	55
62	48	7	55
計	490	61	551

推薦入学は昭和54年度より実施

2. データ収集方法

教務主任(学部長)並びに入試委員会の許可を受け、大学が保管している以下の資料①~③を借用した。①高等学校(以下、高校)の成績：高校から送付されてきた高校の成績概評(最高評点A~最低評点Eをそれぞれ5~1点と点数化した)、全科目の平均評点(1.0~5.0)、および国語、社会、数学、理科、保健、芸術、英語、家庭科の各科目の平均評定(1.0~5.0)②入学試験の成績：国語、英語、化学の各得点(0~100点)、面接評点(A+~Dを各々10点~1点に変換した)、小論文の評点(A+~Dを各々10点~1点に変換した)。ただし、小論文は昭和56年度入学生から実施している。③在学中の成績：大学在学中に受講した科目のうち、対象者全員が履修する必修科目(表2)の得点(0~100点)、しかし、総合看護はA大学の成績評価の基準に基づいて、秀→95、優上→88、優→85、良→75、可→65なる値にそれぞれに変換した)。なお、一般入学生については上記の①②③を、推薦入学生については③のみを分析の対象とした。

〈表 2〉 在学中の必修科目および分析に用いた分類

科目名	分類	科目名	分類
キリスト教概論 教育学 社会学 医療社会学 心理学 人間発達心理 統計学	人文社会	解剖学生理学 病理学 微生物学 栄養学 薬理学 放射線医学 研究法概説	基礎科目
情報科学 化学 生化学 生物学	自然科学	看護学原理 成人看護学 小児看護学 母性看護学 精神看護学 公衆衛生看護論	看護学
人間論 ライフサイエンス	総合科目	公衆衛生学 健康管理 疫学	厚生科学
英語	英語	厚生行政 保健統計 衛生法規 社会福祉社会保障 学校保健 I	
ドイツ語	ドイツ語		
保健体育	保健体育		
		総合看護	総合看護

この期間カリキュラムの変更はなかった

本研究において、秘密保持という視点から、記録類の取扱について、以下のような倫理的配慮をした。まず、記録類の借用にあたり、①プライバシーの保護、②記録類の取扱い場所と方法、③記録類使用者名、④記録類借用期間を明記した文書で、記録類使用許可を教務主任宛に申請した。次に、研究対象者個人が同定されることを防ぐために、研究者が対象者全員に個人コード番号をつけた。そして記録類の個人名をコード番号に置き換え、個人名をすべて削除した。この作業は、学外の研究補助者に依頼し、研究者自身は個人名の明記されたデータを扱わなかった。

3. データ分析方法

①入学試験の成績と高等学校の成績、②入学試験の成績と在学中の成績、③高等学校の成績と在学中の成績、および④在学中の科目間の成績について、年度別と10年間全体のピアソン積率相関係数による相関マトリックスを求めた。在学中の成績については、教科目数が多いことから、類似するグループ毎にこれらを人文社会科学、自然科学、総合科目、英語、ドイツ語、保健体育、基礎科目、看護学、厚生科学、総合看護に

分類し(表2)、それぞれの科目分類群の平均値を用いて分析を行った。さらに、入学試験の成績を独立変数とし、在学中の成績、すなわちこれらの科目分類群それぞれを従属変数とし、ステップワイズ法による重回帰分析を行って、入学試験の成績から在学中の成績をどの程度予測しうるかについても検討した。

次に、年度別に入学試験3科目の成績が上位10位と下位10位の対象者の在学中の成績順位を求めた。この順位は在学中の必修科目の平均値で求めた。また、逆に、卒業時の成績の上位10位と下位10位の対象者の入学時の成績順位を年度別に調べた。この分析は、中途退学者や留年者を除いて行った。

さらに、推薦入学者について、年度別に在学中の成績順位を求めた。

統計処理は東京大学大型計算機センターにて、統計パッケージSPSSを用いて行った。

IV 結果

1. 入学試験の成績と高校の成績の関連性について

入試の成績と高校の評定との関連について検討するために、まず国語—国語、英語—英語、化学—理科について、相関図を作成した結果、図1～図3に示すように有意な相関は認められなかった。国語を例にとると、高校の評定が4.0の者は、入試の36～80点まで、また入試で78点を得た者は、高校の評定では2.7～5.0までとばらつきが非常に大きく、同様のことが他の科目についても、また他年度についてもいえた。

10年間をとおしての入試の成績と高校の成績のピアソンの積率相関係数は、表3に示すような結果を得た。入試の各科目と高校の成績については、最も相関係数の大きかったのが英語—英語($r=.24, p<.001$)であった。全ての入試の成績に、それぞれ有意な相関係数が得られた高校の成績が認められたが、その値はいずれも相関係数は非常に小さく、相関があるといえるものはなかった。

2. 入学試験の成績と在学中の成績の関連性について

10年間の入学試験と在学中の成績についてピアソンの積率相関係数を求めた結果は表4に示すようであった。入試の英語と在学中の英語との相関が中程度にあった($r=.47, p<.001$)。しかしながら、これを年度別にみると、相関係数は.37～.68とばらつきがあった。その他、入試の英語とドイツ語、基礎科目、保健体育、看護学との間に有意な相関係数が得られたが、いずれも相関があるとは言い難い値であった。ドイツ語との

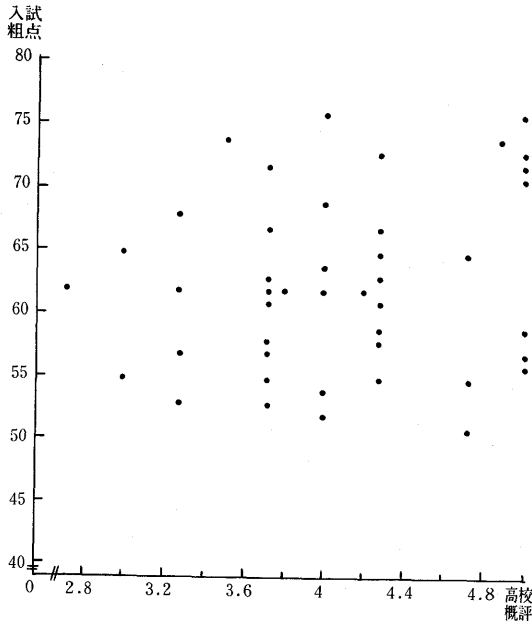


図1 高校の成績と入試得点の相関
(英語—英語)

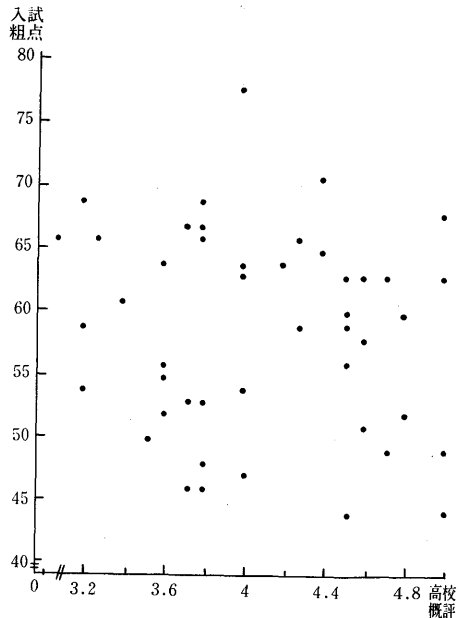


図2 高校の成績と入試得点の相関
(国語—国語)

相関を年度別にみると、中程度の相関がある年度 ($r = .49, p < .001$) から全くない年度まで、さまざまであった。

入試の国語と厚生科学 ($r = .15, p < .001$)、保健体育、自然科学とに有意な相関係数が得られたがいずれも低い値であった。

入試の化学については、10年間をまとめたデータからは、自然科学 ($r = .25, p < .01$) と厚生科学 ($r = .23, p < .01$) に各々弱い相関がみられた。その他、人文社会、ドイツ語、看護学に有意な相関係数が得られたが、その値は低く、相関があるとは言えなかった。年度別にみた場合には、化学は在学中のどの科目とも相関がない年度と、人文社会との相関が中程度あるいは弱い相関がある ($r = .65 \sim .37, p < .01$) 年度とがあった。

面接は、看護学、保健体育、厚生科学、総合看護、基礎科目との間に、有意な相関係数が得られたが、やはり非常に低い値であり、相関があるとは言えなかった。小論文は総合科目との間に弱い相関 ($r = .27, p < .01$) がみられた。その他の科目とは、いずれも有意な相関は認められなかった。

次に人文科学、自然科学、総合科目、英語、ドイツ語、保健体育、基礎科目、看護学、厚生科学および総合看護の在学中の成績を従属変数とし、入学試験科目の英語、国語、化学、小論文および面接の得点と高等学校からの内申書に記載されていた英語、国語、社会、数学、理科、保健、美術、および家庭科それぞれの評価を独立変数として、重回帰分析を行った結果を表5

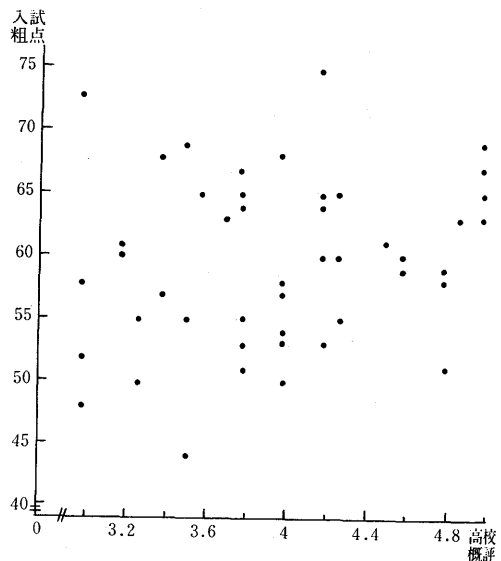


図3 高校の成績と入試得点の相関
(理科—化学)

に示す。これによると、在学中の英語の成績を従属変数とした場合は、重相関係数が、.5586とやや高く、標準偏回帰係数をみると在学中の英語の成績に最も影響を与える入学試験科目は英語であるといえる。また、これ以外にも小論文の得点や内申書に記載されていた英語と国語の評定が若干の影響を与えていると思われる。

〈表3〉 入学試験成績と高等学校概評の相関係数

高校 入試	概評	国語	社会	数学	理科	保健	芸術	英語	家庭
英語	0.068	0.092*	-0.004	0.014	0.014	0.000	-0.006	0.244**	-0.060
国語	-0.056	0.055	0.068	-0.100*	-0.097*	-0.053	-0.030	-0.124**	0.053
化学	0.076	0.018	0.025	0.127**	0.177**	0.031	0.045	-0.028	0.077*
面接	0.133**	0.062	0.080*	0.065	0.063	0.124**	0.186**	0.011	0.118**
小論文	0.036	0.018	-0.001	-0.027	0.004	0.113*	0.099*	-0.018	0.003

* p<.05 ** p<.01

〈表4〉 入学試験成績と在学中の成績との相関係数

在学 入試	人文社会	自然科学	英語	ドイツ語	総合科目	保健体育	基礎科目	看護学	厚生科学	総合看護
英語	-0.011	0.065	0.470***	0.166***	0.048	0.090*	0.124**	0.081*	0.017	0.070
国語	0.051	0.091*	-0.263	-0.078	0.076	-0.132**	-0.047	-0.025	0.147**	-0.046
化学	0.187**	0.251**	-0.055	0.154***	-0.041	0.017	0.069	0.105*	0.236**	0.055
面接	0.073	0.031	0.063	-0.001	0.077	0.145**	0.082*	0.157**	0.141*	0.108*
小論文	-0.040	-0.060	0.006	0.050	0.271**	-0.092	0.152**	0.043	0.116*	-0.006

注：科目分類については表2を参照

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

る。しかし、在学中の英語の成績を従属変数とした場合以外は、寄与率が小さく、また重相関係数の値が小さいので、個々の標準偏回帰係数や重相関係数が有意ではあるが、これらの回帰式はあまり重要な意味をなさないと考えられる。

3. 高校の成績と在学中の成績の関係について

高校の概評および各科目の成績と在学中の成績との関連をみるために、高校の成績と在学中の各科目との相関をみた結果、高校の英語と大学の外国語（英語とドイツ語）の間に弱い相関がみられた($r = .36$, $p < .001$)。また、高校の保健—大学の体育($r = .28$, $p < .001$)、数学—自然科学($r = .18$)、理科—自然科学($r = .22$, $p < .001$)、理科—基礎科目($r = .21$, $p < .001$)等であったが、その他の科目については、有意な相関はみられなかった(表6)。

4. 在学中の成績の科目分類間の相関について

在学中の成績の科目分類間のピアソン積率相関係数は、表7に示すような結果を得た。すなわち、最も相関が高かったのは基礎科目と看護学であり、その相関係数は.68であった。次いで、英語—ドイツ語($r = .62$)で自然科学—人文社会科学($r = .57$)、看護学—厚生科学($r = .52$, $p < .001$)、基礎科目—ドイツ語($r = .51$)などが中程度の相関を示していた。表7に示されるように、英語とドイツ語は他の科目と比較して、在学中の成績との相関が有意に高い傾向があり、特にそれは英語に多くみられた。

5. 入学試験の得点順位と在学中の成績順位の比較について

研究対象者の中から、入学試験の面接、小論文を除く3科目の得点順位が各年度上位10位以内の者計102名、および下位10位以内の者計103名を抽出し、それらの対象者の在学中の必修科目の平均点による順位を調

〈表5〉 ステップワイズ法による重回帰分析の結果

従属変数		人文科学	自然科学	総合科目	英語	ドイツ語	保健体育	基礎科目	看護学	厚生科学	総合看護
標準 偏 回 帰 係 数	英語		.1142		.4298		.2165		.1086		
	国語	.1951	.2186	.1619		.1869				.1166	
	化学			.3183	.1233			.1569		.1695	
	小論文									.1389	
	面接										
	○英語	.1520			.1861	.2591					
	○国語				.1329					.1366	.1883
	○社会					.1605		.2385	.1451	.1752	
○数学		.1436									
○理科											
○保健							.2053	.1128			
○芸術										.1336	
○家庭科	.1196	.1496	.1692				.1671		.1980		
重相関係数	.2989	.3489	.3808	.5586	.3976	.3617	.3355	.3100	.3659	.2555	
寄与率	.0894	.1217	.1450	.3120	.1581	.1308	.1126	.0961	.1339	.0653	

注：科目分類については表2を参照

○印を付した科目は高等学校からの内申書に記載されていた評定である。

本表の標準偏回帰係数および重相関係数はすべて5%の危険率で有意なものである。

〈表6〉 高等学校概評と在学中の成績の相関係数

高校 在学	概評	国語	社会	数学	理科	保健	芸術	英語	家庭
人文社会	0.151**	0.170**	0.147**	0.139	0.122**	0.092*	0.053	-0.045	0.144**
自然科学	0.186***	0.118**	0.159***	0.183***	0.224***	0.145***	0.002	0.010	0.151**
英語独語	0.306***	0.267***	0.254***	0.190***	0.212***	0.081*	0.004	0.362***	0.174**
総合科目	0.111**	0.095*	0.106*	0.050	0.054	0.064	0.079*	0.014	0.090*
保健体育	0.185***	0.139**	0.090*	0.080*	0.121**	0.277***	0.090*	0.037	0.221***
基礎科目	0.257***	0.237***	0.262***	0.132**	0.213***	0.181***	0.054	0.098*	0.192***
看護学	0.230***	0.226***	0.221***	0.091*	0.167***	0.149**	0.048	0.077*	0.236***
厚生科学	0.243***	0.231***	0.239***	0.155***	0.190***	0.107*	0.082*	0.130**	0.171***
総合看護	0.106*	0.117**	0.102*	0.400	0.089*	0.074	0.072	0.045	0.087*

注：科目分類については表2を参照

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

べた。その結果、上位10位以内で入学した者については、在学中も上位10位以内であった者が32名(31.4%)で最も多かったが、逆に、41位以下になった者も10名あった。あとの60名は11~40位に平均して分散してい

た(図4)

入学時に下位10位以内であった者103名については、在学中の成績順位は31~40位の者が34名(33%)と最も多く、11~30位が計38名であったが、上位10位以内に

〈表1〉 在学中の成績の分類間の相関係数

	人文社会	自然科学	英 語	ドイツ語	総合科目	保健体育	基礎科目	看護学	厚生科学	総合看護
人文社会										
自然科学	0.570 ^{***}									
英 語	0.280 ^{***}	0.332 ^{***}								
ドイツ語	0.276 ^{***}	0.413 ^{***}	0.624 ^{***}							
総合科目	0.070	0.032	0.118 ^{**}	0.079 [*]						
保健体育	0.323 ^{***}	0.226 ^{***}	0.280 ^{***}	0.280 ^{***}	0.017					
基礎科目	0.259 ^{***}	0.436 ^{***}	0.496 ^{***}	0.507 ^{***}	0.115 ^{**}	0.357 ^{***}				
看護学	0.329 ^{***}	0.324 ^{***}	0.490 ^{***}	0.450 ^{***}	0.107 ^{**}	0.440 ^{***}	0.681 ^{***}			
厚生科学	0.245 ^{**}	0.300 ^{***}	0.382 ^{***}	0.392 ^{***}	0.157 ^{**}	0.190 ^{**}	0.394 ^{***}	0.519 ^{***}		
総合看護	0.113 ^{**}	0.077 [*]	0.234 ^{***}	0.174 ^{***}	-0.004	0.205 ^{***}	0.239 ^{***}	0.378 ^{***}	0.306 ^{***}	

注：科目分類については表2を参照

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

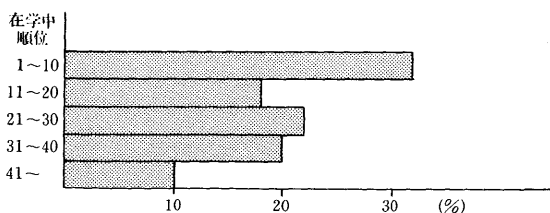


図4 入試得点順位上位10名/年の在学中の平均点順位 (N=102)

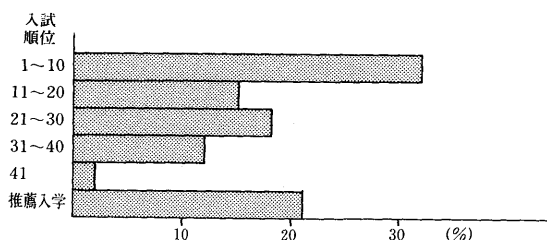


図6 在学中の平均得点順位上位10名/年の入試得点順位 (N=100)

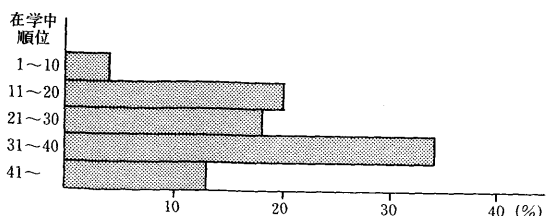


図5 入試得点順位下位10名/年の在学中の平均点順位 (N=103)

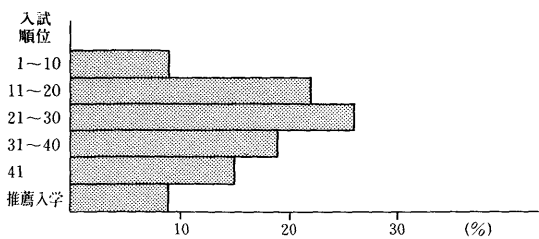


図7 在学中の平均得点順位下位10名/年の入試得点順位 (N=100)

成績が伸びた者も8名(7.8%)いた。(図5)

次に、在学中の必修科目平均点の順位が上位10位以内であった100名について、入学時の成績を振り返ってみると、図6に示すように、入学時にも同様に上位10位以内だった者は32名で最も多かった。また、45名が11位から40位の間にはばらついており、41位以下で入学

した者はわずか2名であった。

在学中の成績の上位10位以内には21名(21%)の推薦入学者が含まれていた。10年間の推薦入学者総数61名のうち、約34.4%が在学中の成績は上位10位以内の成績であったといえる。

在学中の成績が各年度下位10位以内であった対象者

計100名について、入学時の成績を振り返ってみると、ほぼ正規分布を示した(図7)。すなわち、21~30位であった者が最も多く26名(26%)、次いで11~20位と31~40位がほぼ同数であった。上位10位以内で入学してきた者も9名いた。また、推薦入学者9名(推薦入学者の14.8%)もこのグループに属していた。

V. 考察

1. 高校の評定は入学者の選抜にどのように使えるか

今回、入試の成績と高校の成績の間には、英語に弱い相関がみられたのみで、その他にはほとんど相関はみられなかった。これには以下の2つのことが関連していることが考えられる。

第一に、今回の分析対象が、A大学に入学した者のみであること、言い換えると、当時の受験生全体の上位 $\frac{1}{7}$ または $\frac{1}{8}$ を対象にしているために、入試の成績がある程度上位に位置する者の集団であったことが推察される。

第二に、分析の対象とした評定の方法ならびに尺度の違いの問題が影響しているとも考えられる。今回の分析では、高校の成績の評定として用いた尺度は1.0~5.0の相対評価によるものを用いたのに対して、入試や在学中の成績では0~100点または1~10点の絶対評価を用いた。このような性質の異なる評価方法と、レンジの異なる尺度を用いて得た評定や得点について相関係数を求めたことも相関が得られなかった結果の原因として考えられる。しかしながら、A大学として入手可能な高校の成績は相対評価によるものに限定されるために、今回はこれらのデータを用いて分析した。

以上のことをふまえて、次の点を指摘したい。入試の化学と高校の理科、あるいは入試の国語と高校の国語の間に相関がなかったが、そのために化学や国語が入試の科目または入試のないようとして妥当でないとは言いきれない。なぜならば、高校の理科の評定には、物理、化学、生物学などの複数の科目の平均点に基づいて決定されることが考えられるからである。これは、古文、現代国語、漢文などの平均評定として表現されていると考えられる高校の国語についても同様である。

入学許可の決定をするにあたって、相対評価で表現される高校の成績を、慎重に評価する必要があることが今回の研究結果、特に図1~図3の相関図から示唆された。高校の成績が同じでも入試の成績には大きなばらつきがあったことは、高校の成績の評定には学校間で大きな差があることを示唆している。言い換えると、高校の評定は入学試験の指標としては、参考資料

以上のものではないということである。

高校の成績の評定が低いにもかかわらず入学試験で高得点を得た者の中には、浪人による受験勉強の成果である可能性もある。しかし、受験生全体に占める浪人生の割合が10~15%であることから考えると、相関図に示された結果の多くは高校間の差を示していると考えられる。

以上のことから、学校間の格差を客観的に評価する方法がない場合、高校の成績のみで入学の審査をすることは必ずしも望ましいとはいえないと考えられる。このことは、高校の成績の評定が比較的重要な参考資料となる推薦入学生の選考の際、留意すべきことであろう。

2. 入学試験は在学中の学習の成功を予測していたか

入学試験の成績と在学中の成績で関連のあった科目は英語のみであり、その他の科目はほとんど相関はみられなかった。このことは、大きく二つの視点からの考察が可能である。

第一は、前述したように、入学者は受験生全体のうち上位から約14%の者であり、入学試験で選抜された能力的には本来類似している集団であるということである。入学生50人は、本来能力的に類似の集団であるために、入学試験の成績順位は悪くても在学中に学習効果をあげ、成績が伸びる可能性があるということである。これは、入学時の成績順位が下位10位以内の者のうち、約7.8%が在学中に上位10位以内になることから伺える。このことは、学生が入学時に持っている能力には上位の者と下位の者との間には大きい差はなく、学習次第で伸びるという楽観的な希望を教育者に与えている。

第二は、入学試験の科目は英語を除いて、在学中の学習の成功を予測するものではなかったということである。これは、入学試験の科目が、国語や化学でなく、他の科目であっても良いのではないかという議論にもつながるものである。この視点において問われるのは、入学試験で測定すべきものはいったい何かということである。「化学」が看護学を学習するために必要な基礎的能力を評価する科目であるとするならば、自然科学や基礎科目その他の科目との相関があるはずである。「国語」についても同様のことがいえる。しかしながら、本研究では、在学中の成績との関連性はみられなかった。入学試験に対して何を測定し、どのような能力を評価するのかについて、大学としての検討が必要とされる時期にあらう。

なお、入学試験と在学中の成績の相関係数は年度により、その差が大きかった。このことは、両者の相関

が高かった年度と、両者の相関が低かった年度の入学試験の問題の内容を検討することにより、改善の可能性があることを示唆している。

さらに、重回帰分析の結果をみると、在学中の英語の成績以外は、入学試験の成績から有効に予測を行えるとはいえない。

また、面接と小論文の成績と、在学中の成績とに相関がみられなかったことは、面接と小論文の目的や方法、またその評価基準を含め、再検討の必要性を示唆している。

3. 看護学の学習成果を予測する学内での科目は何か

在学中の成績については、基礎科目と看護学の相関が最も強かった。このことは、基礎科目は看護学の基礎として捉えられているので当然の結果ではあろうが、看護学で成功を納めるためには、基礎科目をしっかり学習しておく必要があるともいえよう。また、前述した科目以外に、看護学は厚生科学、英語、ドイツ語、保健体育と中程度の相関がみられたが、このことはこれらの学習の内容よりは、学習へのとり組み方が看護学の学習効果に何等かの関連性をもたらしたのではないかと考えられる。

また、在学中の成績では、外国語、中でも特に英語と他の科目の相関が、英語以外の科目と他の科目との相関に比較して高かった。このことは、入学後の学習については、英語の成績が優秀な学生は、他の科目の成績も優秀であるという傾向があるということである。言い換えると、語学の学習に困難を示す学生は、早期に適切な指導をすることにより、学習を援助することが可能であることが示唆される。

VI. 結 論

本研究の結果、以下のことが明らかになった。

1. 入学試験の成績と高校の成績には英語—英語に弱い相関がみられたが、その他の科目間には相関関係はみられなかった。
2. 入学試験の同得点に対する高校の成績評定には、学校間により大きなばらつきがあった。

3. 入学試験の成績と在学中の成績では、英語—英語に中程度の相関がみられ、化学—自然科学、化学—厚生科学に各々弱い相関が、また、面接—総合科目に弱い相関がみられたが、その他の科目間では有意な相関関係はみられなかった。
4. 高校の成績と在学中の必修科目の成績間には、英語—外国語、保健—体育、理科—自然科学、理科—基礎科目に各々弱い相関関係がみられた。
5. 在学中の成績の科目分類間には、基礎科目—看護学に高い相関関係がみられ、英語—ドイツ語、自然科学—人文社会科学、看護学—厚生科学、基礎科目—ドイツ語で各々中程度の相関がみられた。また、英語とドイツ語は、他の科目より在学中の成績との相関が有意に高い傾向があった。
6. 入学試験の成績順位が10位以内であった者の31.4%は在学中の成績も上位10位以内である一方、入学試験で下位10位以内であった者の約7.8%は在学中の成績が上位10位以内であった。
7. 在学中の成績の上位10位以内の約21%は推薦入学者であり、これは推薦入学者全体の34.4%を占めていた。

VII. おわりに

入学試験は大学で効果的に学習するために必要な基礎的能力を測定するための診断的評価を行うものである。看護大学に入学する者のもつべき基礎的能力として、大学は何を求めているのであろうか。入学試験は受験勉強によって身につけた一次的な能力ではなく、学問に取り組むための基礎的能力と姿勢を診断するものではないかと考える。これらをどのようにして診断するのか、適切な診断方法はどうかについて、十分に検討しなければならないと考える。

他大学においては、入学試験をいわゆるペーパーテストだけではなく、ボランティアの経験やクラブ活動、あるいは一芸に秀でていることなどユニークな入学者選抜方法が採択されつつある。看護学を専門とする学士課程への入学者選抜方法として、ユニークな選抜方法を検討されることを期待したい。

<引用・参考文献>

- 1) 大原宏子, 内野幸子, 藤田美津子: 大学における入学試験選抜方法の相違による影響について, 看護教育, 25(9), 569-574, 1984.
- 2) 坪井良子: 看護学校の入学試験について, 看護教育 21(3), 138-143, 1980.
- 3) 中尾主一他: 看護学生の内申・入試・卒業成績の相関性 [1] 奈良県医科大学付属看護専門学校第一部課程における4年間の内申・入試成績の相関, 看護教育, 23(2), 97-103, 1982.
- 4) 中尾主一他: 看護学生の内申・入試・卒業成績の相関性

- [2] 奈良県医科大学付属看護専門学校第一部課程における4年間の学科・実習成績の相関,看護教育, 23(3), 147-155, 1982.
- 5) 芝祐順, 渡部洋: 入試データの解析, 新曜社, 1988.
- 6) Cecile A. Lengacher & Rosemary Keller: Academic predictors of success on the NCLEX-RN Examination for Associate Degree Nursing Students, Journal of Nursing Education, 29 (4), 163-169, 1990.
- 7) Sharon E. Bolin & Edith L. Hogle: Relationship between college success and employer competency ratings for graduates of a baccalaureate nursing program, Journal of Nursing Education, 23 (1), 15-20, 1984.

Evaluation of the Entrance Examination for Baccalaureate Nursing Program

MARIKO KOYAMA, MICHIKO HISHINUMA, FUMIO KIKUTA, JUNKO KONDO

The purpose of this study was to examine the relationship among the variables of the entrance examination for baccalaureate nursing program, records from senior high school, and records of the courses during nursing program. The variables of the entrance examination were the scores obtained by subjects on their entrance examination which included Japanese, English, Chemistry, short essay examination, and interview. Senior high school records included grade-point-average, Japanese, Social Studies, Mathematics, Science, Health Science, Arts, English and Home Economics. The variables of records during nursing program were achievement scores of the essential courses which taken by all subjects. The data were attained from records of 551 baccalaureate program graduates (graduates from 1982 to 1991, 61 students with recommendation entrance included) from one of the urban colleges of nursing in Japan. Pearson product moment correlations and stepwise multiple regression analyses were used to identify the relationship between variables. As results, there were no relationship between entrance examination records and senior high school records except English ($r = .47, p < .001$). There was moderate relationship between entrance examination English and English during nursing program. Between senior high school record and nursing program records, there was a weak relationship between English & Foreign languages, Health Sciences & Physical Exercise, Science & Natural Science. Among those courses during nursing education, there was a tendency for English scores correlated significantly high with another courses than any other subjects. These findings indicate that educators could identify students early in their college education who would have difficulty in nursing courses and assist them in their learning.

Key Words

nursing
entrance examination
baccalaureate program

聖路加看護大学紀要第20号正誤表

ページ	行	誤	正
21	7	included <u>J</u> apanese	included <u>J</u> apanese
	9	Social <u>S</u> tudies	Social <u>S</u> tudies
	10	achieve <u>m</u> ent	achievement
42	表3	看護婦の__	看護婦のみ
56	引用文献 3)	第 <u>10</u> 回	第 <u>11</u> 回
	引用文献 4)	第 <u>10</u> 回	第 <u>12</u> 回
	引用文献 5)	第 <u>10</u> 回	第 <u>13</u> 回
65	23	<u>いろ</u> の問題	<u>いろいろ</u> の問題
69	下から8	看護学	看護学
	下から9	博士後期過程	博士後期課程
72	下から7	人口呼吸器	人工呼吸器
80	23	発行所・発行機関 記述なし	医学書院
83	最下行	操 革子	操 華子
85	下から9	学会名 <u>Narsng</u> Conference	<u>Nursing</u> Conference